様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３３８９

研究課題名（和文）亡命期ビザンツ帝国の外交から見た13世紀ユーラシア世界

研究課題名（英文）The World of John III Batatzes in the Eurasian Context

研究代表者
村田　光司（Murata, Koji）

筑波大学・図書館情報メディア系・助教

研究者番号：２０７９３５５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで二国間の枠組みで分析される傾向にあった13世紀前半の亡命ビザンツ皇帝ヨアンネス3世（1221-1254年）と諸勢力との外交政策を多角的に分析することで、個別の外交政策の意図や歴史的意義を、ヨアンネス3世の外交戦略一般のなかに位置づけるものである。
ホーエンシュタウフェンのフリードリヒ2世、教皇庁、エピロス（エペイロス）、セルジュークなどとの外交交渉から見えてくるのは、いずれの背後にも、とくにモンゴル帝国の伸張を背景としたユーラシア規模での政治的変化が個別の交渉に影響を及ぼしていた事実である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は亡命期のビザンツ政権を一つの軸として、それが他の勢力と織りなした関係の有り様を多角的に分析することを目指したものである。本研究が対象とした13世紀の前半は、その後現代にまで至るユーラシア西部の政治的変容の決定的時期であり、この時期における政治的諸関係の解明は、現代の同地域における様々な問題とメリットを考える上で重要な基盤的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study aims to provide a multifaceted analysis of the diplomatic policies between the 13th-century Byzantine exiled emperor, John III (1221-1254), and various powers, which have previously been analyzed within the framework of bilateral relations. By examining the intentions and historical significance of individual diplomatic policies within the broader context of John III's diplomatic strategy, this research seeks to shed light on the complexities of his foreign relations.

Through diplomatic negotiations with figures such as Frederick II of the Hohenstaufen dynasty, the Papal See, Epirus, and the Seljuks, it becomes evident that behind each of these interactions, particularly influenced by the expansion of the Mongol Empire on a Eurasian scale, there were broader political transformations affecting individual negotiations.

研究分野：ビザンツ史

キーワード：ビザンツ帝国　ユーラシア　外交史　ネットワーク　古文書学　アーカイブズ史　国際関係史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ビザンツ帝国は第 4 回十字軍によって 1204 年に首都コンスタンティノープルを占領され、一時的に小アジアやバルカン半島に亡命政権を打ち立てることとなった。その中で有力となったのはバルカン半島南部に居を構えたエペイロス（エピロス）の帝国と、小アジア西部を拠点としたニカイア帝国であった。両者はビザンツ帝国の正統な後継を巡って争ったが、1240 年代以降はニカイアが優勢となり、1261 年には首都を奪回して帝国の復興を宣言するに至る。亡命時代のビザンツ帝国は、従来は復興を遂げるビザンツ帝国後期（1261-1453 年）の歴史の前座として語られるのが常であった。

こうした研究状況は 1970 年代ごろから変化を見せ始め、ニカイア帝国を主軸に据えた政治史・社会史研究が現れてくる。これらの研究ではニカイアの亡命政権が周囲の諸政体と取り持った外交関係にも注意が払われ、帝国が小国となりながらも積極的な外交を行い、なお地中海世界の重要なアクターとして振る舞ったことが明らかにされてきた。さらに近年の研究成果はヨアンネス３世治世（1221-1254 年）の帝国が、東地中海世界はもちろん教皇庁やモンゴル帝国といった東西ユーラシアに跨るスケールで影響力を及ぼし得たことを明らかにしつつある。

だが従来の外交政策研究においては、検討の俎上にのぼるのはほとんどがニカイア帝国とある一政体との二国間の交渉であった。またそれらの意義については、ニカイア帝国が最終的に首都を奪還した史実をもって、皇帝たちによる外交交渉の大半が首都奪還のためのものであったとする論調が大勢を占めていたことは否めない。これら先行研究の問題点は、ニカイア政権がその時々に行った政策の意図を結果論的に、特定の視点からのみ見ていることである。個別の外交政策は常に二国間のみを念頭に行われるわけではなく、多国間のより複雑な関係性の網を見つつ捉えられねばならず、それによってビザンツが当時取り持った諸外国との関係やその意図を明らかにできる。またそうした検討においては、ビザンツが首都を奪還したという史実を一端脇において考えることが重要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、従来二国間の枠組みで分析される傾向にあったヨアンネス 3 世治世期ビザンツ帝国（1221-1254 年）と諸外国との外交交渉を多角的に分析することで、個別的外交の意義をヨアンネス 3 世の外交政策一般のなかに位置づけることである。近年の研究成果が明らかにしているように、ヨアンネス３世の外交交渉相手は東地中海世界に留まらず東西ユーラシアに跨っている。本研究ではこうした個別的な外交交渉の過程を統合的に分析し、それらの意図と歴史的意義をユーラシア史の枠組みで捉えなおす。この作業によって、ヨアンネスの外交戦略の一貫性ないしは変化の過程を明らかにする。

本研究の独自性は、一つにはこれまで常に念頭に置かれていた首都奪還というポリシーを排除して考えること、もう一つには先行研究よりも広い領域、かつ多国間の枠組みでヨアンネスの外交政策を捉え直すことにある。さらにヨアンネス 3 世時代のビザンツ帝国と多様な諸政体との関係、あるいはその諸政体同士の関係をつぶさに見ることは、結果として当時のビザンツ帝国をユーラシア世界というこれまでにない規模の国際関係のなかに位置づけることに繋がると予想される。短い期間に限定してではあるが、この課題が達成されるならば、ビザンツから見た一つの世界史像を描くことにも繋がり、近年盛んに論じられるグローバルヒストリーの試みに、一地域政体からの異なる視点を提示することが期待される。

３．研究の方法

本研究では狭義の課題として、亡命期ビザンツ帝国の外交交渉記録をまとめ上げ、多国間の枠組みのなかで帝国の外交政策の意図と歴史的意義を明らかにする。時期的枠組みの設定として、首都を失った亡命期において長期間皇帝として在位したヨアンネス 3 世（1221-1254 年）の治世を中心に据える。この時代幅はニカイア帝国（1204-1261 年）の大半を占めており、帝国の重要な外交交渉の多くが彼の治世になされた。史料の制約上、当時のビザンツ人が諸勢力と取り持ったあらゆる関係を調べ上げることは不可能である。むしろ比較的記録に残りやすい国家間の諸関係に注力し、ビザンツの対外政策を多国間の枠組みで考え直す。そのため必要に応じて、ビザンツと関係を構築していた他の諸勢力同士の外交関係も、念頭において検討せねばならない。

ヨアンネス 3 世の外交政策を検討するにあたっては、彼と他国のあいだで交わされた外交文書の分析が欠かせない。研究代表者はこれまでの研究によってすでに外交文書の全体像は把握しているが、伝来する文書および伝来しないものの存在したことが確認される文書の総数は約 30 点ほどである（ギリシア語、ラテン語など）。これら文書史料を補うのは、ビザンツや他の地

域において編纂された数多くの叙述史料、とりわけ十字軍関係者や旅行者などの記録である。これらについては、未だ体系的な分析がなされていないため、ビザンツと他勢力の外交交渉についての記録を時系列順、かつ個別の勢力ごとにまとめる作業を行う必要がある。これによってヨアンネス 3 世が個別の勢力とどのような交渉を行ってきたのかの事実関係を整理する。

次にこうして集めた個別のデータを時系列順にまとめ上げ、2 国間の枠組みでは捉えられない、多国間の枠組みのなかでヨアンネス 3 世の外交政策を分析する作業を行う。例えばヨアンネスはその治世末期にしばしばバルカン半島のブルガリアやエペイロス（エピロス）に対し遠征を行っていたが、こうした遠征活動を遂行するにあたっては、より遠方のモンゴル帝国との安定した関係が不可欠であったと推測される。

４．研究成果

初年度（2019 年度）は、研究史をたどる作業、史料収集、そして外交関係記録のデータ整理を主目的に据えた。本研究の対象となる時期、すなわち 13 世紀前半の外交交渉については、史実の確定があいまいなままにされている箇所も多く、個別の事件に関する検討を積み重ねていかねばならない。そのため研究全体に関する作業と並行して、1230 年代後半から 1240 年代前半にかけての、主として外交に関するニカイア政権のクロノロジーを検討した。その初発の成果として 2019 年 7 月に、オーストラリアのマコーリー大学で開催された国際学会において“Political Corruption and Anticorruption in the Thirteenth Century Byzantium”と題した報告を行い、とりわけ外交に携わったとある帝国役人の行動の検討を通じて、いくつかの史実の年代確定（修正）を試みた。もう一点、13 世紀後半にアルバニアの修道院聖堂に描かれた壁画と銘文のコンテクストを検討した論文を作成し、その史料の誕生が 12 世紀以降のビザンツとシチリア王国その他の外交的やり取りの間に位置づけられることを論証した。この成果は 2019 年度の『西洋史学』誌に日本語で掲載された（“壁画と文書の出会い――ビザンツ後期キリスト教聖堂における皇帝文書利用の一側面――”,西洋史学 268）。

2020 年度はコロナ禍の最中であり、海外での調査・発表計画を全面的に見直し、文献史料の検討に集中した。昨年度から進めている 13 世紀外交関連記録はおおよその整理を終え、事実解釈や編年について（再）検討すべき点をいくつか見出すことができた。とりわけ豊かな情報源であるゲオルギオス・アクロポリテスの『歴史』については、既存の諸研究による到達点を踏まえつつ、今後の作業のため日本語訳も進めた。この年度には、ニカイア帝国とホーエンシュタウフェン朝の婚姻関係の直接のきっかけとなった、ニカイア皇妃エイレネ・ラスカリナの死去年代にまつわる編年、および外交政策の再検討を成果として発表した。従来、エイレネは 1239 年に死去し、妻を失った夫であるニカイア皇帝ヨアンネス 3 世は、臣民の感情に配慮し少し時期をおいてからホーエンシュタウフェン朝皇帝家の女性を再婚相手として迎えた（1241 年前半頃）とされていたが、エイレネ死亡時期の根拠となる史料記述（天文記録）を、天文学者との協力によって再解釈し、彼女が実際には 1240 年に亡くなった可能性が高いこと、それに伴って性急に再婚交渉が進められたことを論証した（“Cometary records revise Eastern Mediterranean chronology around 1240 CE”, PASJ 73/1）。

2021 年度は依然として海外での調査・発表が出来なかったことから、引き続き文献史料の検討を中心に行った。亡命期ビザンツ帝国のヨアンネス 3 世治世における外交を総合的に分析するという本研究の性格上、先年度刊行したホーエンシュタウフェン朝との関係を論じた論考に続き、本年度は従来から進めていた対セルジューク朝関係および対教皇庁関係についての論考をそれぞれ仕上げることが出来た。前者においては従来認識されていなかった新たな人的交流の可能性について論じ、後者では外交文書を用いたコミュニケーションの在り方について新たな視点を提供している。両論文とも、2022 年度にそれぞれヨーロッパの出版社により刊行された（“Between Byzantium and the Sultanate of Rūm: Manuel and Michael Laskaris and the Origin of the Tzamantouroi”, in Byzantine Cappadocia, Leiden; “Dei et ecclesiae inimicus: A Correspondence between Pope Gregory IX and John III Batatzes”, in Communicating Papal Authority in the Middle Ages, Routledge）。また、副次的な産物ではあるが、本研究に関係するとある写本史料を分析していた際に、これまで教会関連の著作の一部と報告されていた箇所が、実際には 9 世紀に編纂された年代記からの（改変された）抜粋であることを発見、論証し、その成果がギリシャの査読誌に掲載された（“An Overlooked Excerpt of the Chronicle of George the Monk in Codex Parisinus Suppl. gr. 1238”, Parekbolai 11）。

最終年度となる 2022 年度は、残る大きな課題である、ニカイアと対立したエペイロス（エピロス）政権、およびヴェネツィアを始めとするイタリア諸都市との関係に本格的に取り組んだ。ニカイア（ニカイア）と正統なビザンツ政権の座を争ったエペイロス（エピロス）政権との関係について、名目上ではあるものの後者の前者への従属が決定された和約が、近年定説となりつつある 1241 年ではなく、旧説である 1242 年であることを、根拠となるアクロポリテス『歴史』の歴史学的・文献学的な新解釈およびユーラシア規模での政治史的コンテクストの分析から明らかにする発表を、2023 年 3 月の日本ビザンツ学会大会にて行った。ここでの内容と発表の場で得られた議論をもとに、論文を執筆中である。

本研究期間の全体を通じて、ニカイア（ニカイア）帝国のとりわけヨアンネス 3 世バタツェス

治世における、亡命ビザンツ政権の外交のありようを、複雑な網の目の中で展開される多数のアクターのやり取りのなかに位置づけることを目指しつつ分析してきた。ホーエンシュタウフェンのフリードリヒ 2 世、教皇庁、エペイロス（エピロス）、セルジュークなどとの外交交渉から見えてくるのは、いずれの背後にも、とくにモンゴル帝国の伸張を背景としたユーラシア規模での政治的変化が個別の交渉に影響を及ぼしていた事実である。研究成果のまとめの一部として、13 世紀ビザンツとモンゴルの関係を通覧する内容を 2022 年 11 月に西洋史研究会大会の共通論題にて発表したが、今後は個別の成果をより有機的に関連させつつ、ユーラシアの枠内でのニカイア帝国像を提示することが求められよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 Hayakawa Hisashi、Murata Koji、Soma Mitsuru	４．巻 134
２．論文標題 The Variable Earth’s Rotation in the 4th?7th Centuries: New ΔT Constraints from Byzantine Eclipse Records	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Publications of the Astronomical Society of the Pacific	６．最初と最後の頁 094401～094401
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1088/1538-3873/ac6b56	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 BARYSHEV EDUARD, 村田光司, 白井哲哉	４．巻 36
２．論文標題 ［書評］大阪大学アーカイブズ編『アーカイブズとアーキビスト－記録を守り伝える担い手たち－』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アーカイブズ学研究	６．最初と最後の頁 94-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加納 修、小坂 俊介、村田 光司	４．巻 6
２．論文標題 [翻訳] ヨルダネス『ゲティカ』翻訳 (1)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東方キリスト教世界研究	６．最初と最後の頁 3～57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/eoas_6_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村田光司	４．巻 14
２．論文標題 ［新刊紹介］Christian GASTGEBER, Ekaterini MITSIOU, Johannes PREISER-KAPELLER & Vratislav ZERVAN (eds.), A Companion to the Patriarchate of Constantinople	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋中世研究	６．最初と最後の頁 216-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Koji Murata	4．巻 11
2．論文標題 An Overlooked Excerpt of the Chronicle of George the Monk in Codex Parisinus Suppl. gr. 1238	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Parekbolai	6．最初と最後の頁 113-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.26262/par.v11i0.8216	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村田光司	4．巻 96
2．論文標題 ［書評］河内祥輔、小口雅史、M・メルジオヴスキ、E・ヴィダー編『儀礼・象徴・意思決定 日欧の古代・中世書字文化』―西洋史の立場から―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 法政史学	6．最初と最後の頁 94-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村田光司	4．巻 3
2．論文標題 キルギス共和国出土ローマ・東ローマ帝国貨幣と模倣貨	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Heritex	6．最初と最後の頁 386-395
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Koji Murata, Kohei Ichikawa, Yuri I Fujii, Hisashi Hayakawa et al.	4．巻 73(1)
2．論文標題 Cometary records revise Eastern Mediterranean chronology around 1240 CE	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Publications of the Astronomical Society of Japan	6．最初と最後の頁 197-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/pasj/psaa114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hisashi Hayakawa, Yuri I. Fujii, Koji Murata et al.	4．巻 11
2．論文標題 Three case reports on the cometary plasma tail in the historical documents	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of Space Weather and Space Climate	6．最初と最後の頁 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1051/swsc/2020045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hisashi Hayakawa, Tomoya Iju, Koji Murata, Bruno P. Besser	4．巻 909(2)
2．論文標題 Daniel Mogling's Sunspot Observations in 1626-1629: A Manuscript Reference for the Solar Activity before the Maunder Minimum	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The Astrophysical Journal	6．最初と最後の頁 194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3847/1538-4357/abdd34	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Koji Murata	4．巻 Supplement 9
2．論文標題 Procopius in the Far East: Japanese Language Studies and Translations	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Geoffrey Greatrex ed., A Guide to Research on Procopius in languages other than English, New Castle upon Tyre	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 村田光司	4．巻 268
2．論文標題 壁画と公文書の出会い：中世正教世界における支配者文書利用の一側面	5．発行年 2019年
3．雑誌名 西洋史学	6．最初と最後の頁 78-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村田光司	4．巻 80-2
2．論文標題 ［書評］高田英樹（編訳）『原典 中世ヨーロッパ東方記』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 史苑	6．最初と最後の頁 214-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村田光司	4．巻 11
2．論文標題 ［新刊紹介］Eleanor Dickey, Learning Latin the Ancient Way: Latin Textbooks from the Ancient World	5．発行年 2019年
3．雑誌名 西洋中世研究	6．最初と最後の頁 174-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 村田光司
2．発表標題 東と西のあいだで――ビザンツによるモンゴル関連情報の集積・体系化・外交実践
3．学会等名 2022年度西洋史研究会大会共通論題「一三世紀ユーラシアにおけるキリスト教世界とモンゴル帝国」（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 村田光司
2．発表標題 ニカイアとテサロニケの和約：1241年、1242年、それとも1243年？
3．学会等名 第20回日本ビザンツ学会大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 村田光司、武田一文
２．発表標題 長塚安司氏旧蔵ラコニアおよびカッパドキア調査資料について
３．学会等名 第20回日本ビザンツ学会大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 村田光司
２．発表標題 中央アジアにおけるビザンツ型ブラクテアトの伝播・類型・機能
３．学会等名 ワークショップ「前近代中央アジアにおける文化の交流と非交流」
４．発表年 2021年

１．発表者名 村田光司
２．発表標題 エーゲ海域ビザンツ修道院と海賊行為
３．学会等名 第8回海域ヨーロッパ研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 樋口諒，村田光司
２．発表標題 三次元デジタルアーカイブによるギリシャ・ビザンティン聖堂遺跡群の研究資源化
３．学会等名 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会「人文学のための情報リテラシー」第１回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Koji Murata
２．発表標題 Political Corruption and Anticorruption in Thirteenth-Century Byzantium
３．学会等名 Dissidence and Persecution in Byzantium: 20th Australasian Association for Byzantine Studies Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koji Murata
２．発表標題 Comment to "Monasteries, Ships and Islands in Byzantium"
３．学会等名 Dr. E. Mitsiou's Lecture: Monasteries, Ships and Islands in Byzantium (Rikkyo University)（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Tomoyuki Masuda (ed.), Koji Murata et al.	４．発行年 2022年
２．出版社 Alexandros Press	５．総ページ数 315
３．書名 Byzantine Cappadocia (担当：Between Byzantium and the Sultanate of Rum: Manuel and Michael Laskaris and the Origin of the Tzamantouroi, pp. 234-266)	

１．著者名 Minoru Ozawa, Thomas W. Smith, Georg Strack (eds.), Koji Murata et al.	４．発行年 2023年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 222
３．書名 Communicating Papal Authority in the Middle Ages (担当：Dei et ecclesiae inimicus: A Correspondence between Pope Gregory IX and John III Batatzes, pp. 159-172)	

１．著者名 Taner Korkut, Satoshi Urano, Koji Murata et al.	４．発行年 2020年
２．出版社 Koc University Press	５．総ページ数 354
３．書名 The City Basilica of Tlos (担当：Roman and Byzantine Coin Finds from the Basilicaおよび Byzantine Lead Seals from the Basilica)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関